

「挑戦と希望の地域支援・地域支援における他機関との連携」に関わった事の振り返りと気づき

中央東・檜北地区地域包括支援センター 保健師 黒木克伸

語ルシストの会に参加して初めてのイベントに参加させて頂いた。

繋ぐ仕事をしているが、繋がった後がどのように訪問看護ステーションが支援をされているのか見る機会の中々ない。訪問看護ステーションの動画により支援の状況を観る事ができた。包括支援センターが連携機関で入った事例もあり、引き続き連携の必要性を感じた。

統計上、宮崎市に精神疾患者が2万人程いらっしや、地域支援がさらに重要となっていく。統合失調症の方が地域に多く住まれている。

精神障がいが見えないため、支援者が世帯に入って把握する事がある。一人ひとりの考え方や価値観があるため、支援者だけの考えでは進める事ができないのが事実である。本人が困ったタイミングで支援が受けられるように体制作りや相談できるようにしていかなければならない。

嶋田市議がディスカッションの中で、精神障がいにも対応した地域包括支援センターが必要になっている。質問の中でも、本人の見守りをする中、衣食住についてどこに相談しておけばよいのかと話が合った。高齢者と同じであり、精神障がいの方でも、生活は同じである。買い物先や不動産や金融機関や医療機関や障がい福祉サービス事業所や介護保険サービス事業所などと連携していくことが、体調の変化の早期発見につながっていく。

精神障がいについての地域理解が進んでおらず、何かあった際、通報のように地域住民から連絡が入ってくる。本人は良い事を行っている事が、捉え方次第で、相手に対して悪意となっており、トラブルとなっているケースも見られる。

なぜ、本人がその行動をとっているのか、目的は何なのか、真意は何なのか、まで考えなければ、本人が望まない支援となっていく場合もある。

今回のイベントを通して、はまゆう家族の会の存在を知り、家族へ適切な情報提供ができたらいと考えた。

引き続き、精神障がいについての理解や病院からの地域移行に向けて、関係機関との連携が進むことを願っていききたい。高齢者支援だけではなく世帯丸ごと支援として、寄り添っていけるように心がけていききたいと改めて感じた。